



## 👁️👁️ みどころ

近時は「近未来モノ」映画が多い。「人生いろいろ」なら、近未来もいろいろだ。しかして、阪本順治監督から「黒澤明の孫が日本ではなく、韓国で生まれた」と言われたポン・ジュノ監督が、フランスの原作マンガを元に描いた近未来とは？

密閉空間の面白さは「潜水艦モノ」に限らず、列車モノも同じ。それは馮小剛（フォン・シャオガン）監督の『イノセントワールド』（04年）でも明らかだが、氷河期の地球を17年間も走り続けているスノーピアサーの中では一体どんな階級闘争が・・・？

ソチ冬季五輪が終わった今、美しい雪と氷の世界の中で展開される、人類の「再生の物語」を、あなたはどうか解釈し、どう受け止める？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■この世界観に注目！あなたは「箱舟」派？「列車」派？■□■

韓国のポン・ジュノ監督といえば、『殺人の追憶』（03年）（『シネマールム4』240頁参照）、『ゲムル 漢江の怪物』（06年）（『シネマールム11』220頁参照）、『母なる証明』（09年）（『シネマールム23』131頁参照）と、問題提起作、ヒット作を次々に生み出している、韓国を代表する監督。そのポン・ジュノ監督が魅入られたのが、フランスのジャック・ロブ等が描いたSFマンガ『LE T RANSPERCENE I GE』で、読みえた時には既に映画化を決意していたらしい。映画館で映画を観ると、今はいつもの『ノア 約束の舟』（14年）が予告編で上映されているが、「この手の映画」が待望されるのは、世の中に不安が広がっているため。仏教流に言えば、「末法思想」が広がっているためだ。『ノア 約束の舟』の「世界観」は言うまでもなく「旧約聖書」の「創世記」の

それだが、本作の「世界観」は2014年7月1日の「ある出来事」から17年後の2031年のこと。2031年には地球は氷河期に入り、人類を含む生物はすべて絶滅しているという世界観だ。それ自体は子供でも思いつくような突飛な「世界観」にすぎないが、面白いのは、そうなった原因が100%人為的なものであることだ。

本作冒頭が描くのは2014年7月1日の出来事だから、それは間近。私の『シネマルーム32』の出版準備中になるはずの時期だ。地球温暖化問題やその解決策は議論すればきりが無いが、環境保護団体や開発途上国の反対を押し切って、79カ国によって人口冷却物質「CW-7」が大気圏上層部に散布されるというビックニュースが報道され、実行された。しかし、その「見込み」とは裏腹に到来したのが、新たな氷河期というから皮肉なもの。「過ぎたるは猶及ばざるが如し」の典型だ。

『ノア 約束の舟』ではラッセル・クロウ演じる「神と共に歩んだ正しい人」であるノアが、神の指示に従って家族とその妻子、そしてすべての動物の「つがい」を箱舟に乗せて生存を図ったが、CW-7の散布から17年後の2031年の今、生き残っている人類は「スノーピアサー」の中だけらしい。鉄道マニアでウィルフォード社を率いるウィルフォード（エド・ハリス）が開発した全26両、全長500メートルを超える列車「スノーピアサー」は、極寒の北極から灼熱のアフリカまで1年に地球を一周する列車で、エンジンが命。しかし、外部との接触を一切断たれたままエンジンを半永久的に動かし続けるには、すべてが持続可能なシステムでなければならないはず。さて、ウィルフォードはそれをどうやって？

『ノア 約束の舟』は洪水が去った後には新たな生きる世界が見えていたが、スノーピアサーはいつまで走り続けるの？また、第2の氷河期はいつまで続くの？そんな壮大な「世界観」に注目したい。しかして、あなたは箱舟派？それとも列車派？

## ■この階級対立はなぜ？民主主義ではムリなの？■

本作のストーリー展開の軸になるのは、階級対立。つまり、カーティス（クリス・エヴァンス）、ギリアム（ジョン・ハート）、エドガー（ジェイミー・ベル）たち貧困層はスノーピアサー最後尾車両に押し込められて、スラム街さながらのみすぼらしく汚れ、飢えた生活を17年間も続けていたのに対し、最前方のエンジン車で生活するウィルフォードはもとより、前方車両の富裕層たちは、氷河期以前の地球と変わらない生活を送っていた。ちなみに、この貧困層VS富裕層という「二分法」は、『pentハウス』（11年）に見る、「ザ・タワー」最上階に住む1%の富裕層VS貧困層の対立（『シネマルーム28』228頁参照）や、『トータル・リコール』（12年）に見る、富裕層が暮らす「ブリテン連邦（UFB）」VSその支配下にある「コロニー」に住む貧困層（『シネマルーム29』225頁参照）でも顕著だった。

ローマ帝国は奴隷制社会だったが、その後の歴史の歩みの中で17～18世紀には資本主義・民主主義が広がっていった。そして、資本主義・民主主義VS社会主義・一党独裁主義の優位性が争われた20世紀は結局前者が勝利した。CW-7の散布も79カ国による民主主義的決定だったはずだが、なぜスノーピアサー内ではそのような階級対立が？な

ゼスノーピアサー内で民主主義が機能しないの？

本作は、ラストに向けてはじめてスノーピアサーの開発者であるウィルフォードが登場し、彼の哲学、人生観、そして世界観が語られるが、そのキーワードは最近よく使われている「持続可能性 (= sustainability)」。つまり、エンジンを半永久的に動かし続けるためには水、空気、食料、人等々すべてが持続可能性 (sustainability) を備えていなければならないというわけだ。その世界観をスノーピアサー内で現実的に「執行」しているのは、ウィルフォードの片腕で総理の女性メイソン (ティルダ・スウィントン)。そして、メイソンが最も大切にしている言葉は、「秩序」「役割分担」だ。その言葉自体はなるほどと思えるものだが、そのためには階級対立が不可欠？それは民主主義では実現できないの？本作を鑑賞するについてはその点をしっかり検討する必要がある。

## ■□■列車内という密閉空間の面白さは潜水艦モノと同じ！■□■

「潜水艦モノ」が面白いのは、その密閉空間の中に濃密な人間ドラマが凝縮して展開されるためだ。しかして、「列車内」という密閉空間でもその面白さは同じだということを実証したのが、チベット鉄道の列車内で展開される、一匹狼のスリと窃盗集団そして警察官を含めた三つ巴の攻防戦の面白さを描いた、馮小剛 (フォン・シャオガン) 監督の『インセントワールド』(04年) だった (『シネマルーム17』294頁参照)。それは、本作でも同じだ。パンフにある門間雄介氏のコラム『隙のないシナリオに織り込まれた、人類への痛烈な皮肉』には次のとおり書かれている。すなわち、「構成も実に端正で、映画全体の1/4に当たる序盤30分が『第1幕』、1/2に当たる続く60分が『第2幕』、残り1/4に当たる最後の30分が『第3幕』という、ハリウッド式の脚本術『3幕構成』にぴたりと符合する形でまとめられている。」また、「第1幕はカーティスらが最後方車両を突破する『ビギニング (状況設定)』、第2幕は様々なハードルを乗り越えてカーティスが最前方車両の扉の前へ到達する『ミドル (葛藤)』、そして第3幕がエンジン室で全ての謎が明かされる『エンド (解決)』だ。」

その結果、第1幕に見る、最後尾車両から前方への突入戦、第2幕に見る、斧を振り回しながらの激突や真暗闇の中で松明をかざしながらの白兵戦は、狭い列車内なればこそそのド迫力になっている。1月19日に観た、パレリア・サルミエント監督の『皇帝と公爵』(12年) では、いかに広く大量の兵を分散させるか、逆にいかに早く一定の地点に兵を集中させるかが作戦のポイントだった。しかし、狭い列車内ではそんな作戦は無用で、頼れるのはもっぱら体力と気力だけになる。さらに、本作中盤 (第2幕) では、ボン・ジュノ監督は、植物室や水族館、さらに寿司車両やバー車両、サウナ車両等々を見せてくれるから、そんな密閉空間の面白さにも注目！！

## ■□■韓国と韓国映画のグローバル性に注目！■□■

ソチ五輪の女子フィギュアスケートでは、浅田真央選手と韓国のキム・ヨナ選手がさかんに対比されたが、私が思うにその違いは、森喜朗元総理の問題発言、「大事な時に転ぶ」

か否かではなく、グローバル性。キム・ヨナ選手が何カ国語を喋れるのかはよく知らないが、少なくとも英語はペラペラだ。また、日本では評判の悪い韓国初の女性大統領、朴槿恵（パク・クネ）氏は日本語はダメだが、英語、スペイン語、中国語がペラペラだから、その点でも安倍晋三総理のグローバル性を凌駕している。

本作の第1幕を見ていると、主人公のカーティスをはじめとする登場人物はハリウッド俳優ばかりだから、本作はポン・ジュノ監督の韓国映画だという意識が次第に薄れてくる。そんな中、第2幕で突如登場するのが、ナムグン・ミンズ（ソン・ガンホ）とその娘のヨナ（コ・アソン）だ。彼らが監獄セクションに収監されているのは「クロノール依存症」のためだが、カーティスたちが各車両の扉を開けて列車前方へ進むためには、列車のセキュリティを設計したプロフェッショナルであるナムグンの協力が不可欠だ。ポン・ジュノ監督がソン・ガンホを起用するのは、『殺人の追憶』『グエムル 漢江の怪物』に続いて三度目だが、今回は前2作と違って彼は主役ではなく、カーティスたちの引き立て役に徹している。また、韓国語しかしゃべれないミンズが、カーティスたちと会話するのは翻訳機を通してだから、会話の中ではグローバル性は十分発揮できていないが、結末に向けては・・・？日本ではグローバル性を発揮できる俳優は、渡辺謙、真田広之、浅野忠信、菊地凛子等だが、本作を観れば、韓国や韓国映画がいかにかグローバル性に優れているかがよくわかるから、それに注目！

## ■市場は米中へ拡大！産経新聞の記事に注目！■

この評論を書いていた2月25日の産経新聞朝刊に、本作とポン・ジュノ監督をネタとした「15 韓流監督の世界挑戦」という記事が登場した。同記事によると、ポン・ジュノ監督の『殺人の追憶』は阪本順治監督をして、「黒澤明の孫が日本ではなく、韓国で生まれた」と言わしめたほどの衝撃を与えたようだ。同記事は「あれから10年後」に、本作をもって「遂に本格的に世界進出へ踏み出した」ポン・ジュノ監督と韓国映画を分析している。

同記事は『イノセント・ガーデン』（12年）のパク・チャヌク監督と、『危険な関係』（12年）のホ・ジノ監督をポン・ジュノ監督とともに取りあげ、韓国でいう「386世代」（つまり、1990年代に30代で、80年代には大学生で学生運動を体験し、60年代生まれ）に属する3人のニューリーダー性を述べているが、私もまったく同感だ。若手ハリウッド女優ミア・ワシコウスカと、私の大好きなハリウッド女優ニコール・キッドマンを共演させた『イノセント・ガーデン』は、予測不能な展開と美しい映像に見る人間心理のミステリアスな深層を堪能することができる映画だった（『シネマルーム30』131頁参照）。また、ピエール・ショデルロ・ド・ラクロ原作の『危険な関係』の、舞台を1930年代の上海に置き換えたうえ、プレイボーイ役に韓国人俳優・張東健（チャン・ドンゴン）を起用し、中国人女優の章子怡（チャン・ツイイー）と張柏芝（セシリア・チャン）を激突させた映画『危険な関係』も面白かった（『シネマルーム32』掲載予定）。

韓国映画の牽引役となっているポン・ジュノ、ホ・ジノ両監督は、「韓国映画アカデミー」の卒業生であることも共通している。中国に「北京電影学院」や「中央戲劇学院」がある

ように、韓国には「プロの映画人を養成するための韓国映画アカデミー」があり、彼らは2人ともそこを優秀な成績で卒業したエリートなのだ。日本ではテレビでアホバカ・バライティーが毎日垂れ流されているが、その主役はお笑い芸人と局の意向に迎合したコメンテーターばかり。そればかりか、最近では映画にも主演や監督でお笑い芸人が進出しているが、その多くは素人に毛の生えたようなものだから、「映画士官学校」を優秀な成績で卒業したエリートたるポン・ジュノ監督やホ・ジノ監督にかなうはずがない。彼ら2人が尊敬する映画監督として、黒澤明や小津安二郎ら日本の名匠を挙げていることをみれば、日本は今こそ韓国に学び、長期的視点に立って国を挙げてのプロの映画人養成機関を創設することが求められているはずだ。

## ■□■氷河期はいつまで？列車が転覆したら・・・？■□■

2月24日に閉幕したソチ冬季五輪は、心配されたテロ事件が発生することもなく、美しい雪景色と氷の世界を堪能させてくれた。他方、スノーピアサーは氷河期となりすべての生物が息絶えた世界の中を走っているわけだが、スクリーン上に映る一面の雪景色は美しいので、観客にはその「厳しさ」がなかなか伝わってこない。そこで、ポン・ジュノ監督は第1幕で、富裕層に反抗したためその処罰として右腕を列車の外に出させるという刑罰を受ける男アンドリュー（ユエン・ブレムナー）の姿を映し出していき、わずか数分の間に外の冷気でカチンカチンになってしまった右腕がハンマーでかち割られるシーンを観れば、誰だって氷河期の寒さの厳しさを実感できるが、この氷河期は一体いつまで続くの？

本作はさまざまな闘争をしながら、スノーピアサーの最後尾車両から少しずつ前方に進んでいくカーティスたちの「反乱」のストーリーがメインだが、他方でそんな「大きな視点」からの問題提起も示していく。もっとも、そんな視点を持つことができるのはセキュリティを担当したミンスだけで、カーティスたちは目の前の闘争のことで頭がいっぱい。第1幕では、兵たちが持つ銃に弾丸が入っているのか否かが大きなポイントとなり、「弾丸は切れている」というカーティスの読みがまんまと当たったが、本作中盤から後半にかけてはド派手な銃撃戦が展開される。これはちょっと意外だし、ストーリーの整合性にも問題があるが、それはともかく、ひょっとして氷河期のピークは既に過ぎたのでは？すると、ひょっとして人間がスノーピアサーの外で生きていく条件も生まれているのでは？ミンスがそんな風に考え始めたのは、銃撃戦によって弾丸の孔が開き、スノーピアサーの窓から入り込んできた雪の結晶を見た（分析した）ためだ。

2011年7月に中国の浙江省で発生した高速列車転覆事故は、2005年4月にJR塚口駅とJR尼崎駅の間で起きたJR福知山線脱線事故と同じような大規模な列車転覆事故だったが、2014年から17年間も走り続けているこのスノーピアサーがもし転覆したら・・・？ミンスがそんなことをいつから考えるようになったのかは本作を鑑賞しながらじっくり考えてもらうしかないが、もしミンスがそんな考えを実行に移せば、大変なことに・・・。

## ■□■クライマックスに向けての想定外の展開をじっくりと！■□■

列車の扉1枚を開ける毎にクロノール2コをもらうことを条件にカーティスへの協力を続けてきたミンスが、前述のようなカーティスとは少し違う「目標」を持ち始めたところから、本作のクライマックスにかけての展開は想定外のものになっていく。中盤の展開からそのままクライマックスを予想すれば、カーティスたちの最前方車両に向けての攻撃が成功し、スノーピアサーをウィルフォードから乗っ取るということだが、さて、本作はそんな筋書きどおりに？

エンジン車両まで到達したカーティスがウィルフォードとの「ご対面」を果たした後は、ウィルフォードの口からカーティスたち最後尾車両の人々の精神的リーダーであったギリアムと連絡を取り合っていたという衝撃の事実が明かされる。さらに、「持続可能性」に最大の価値をおき、エンジンの動きを止めないためにはどんな犠牲もいとわなかったウィルフォードが、カーティスをスノーピアサーの次期リーダーに指名しようとしていたことが明かされていくから更にビックリ。そんなストーリー展開を見ていると、カーティスがウィルフォードの説得(?)によって、かなり「その気」になっているのはまちがいなさそう。しかし、第1部で最後尾車両から前方に連行されていったターニャ(オクタヴィア・スペンサー)の子供を含む多くの子供たちが、その小さい身体にふさわしい「ある役割」を果たしていることを知らされると、カーティスはさすがにウィルフォードの価値観にはついていけなかったようだ。

本作のクライマックスに向けては、カーティスとウィルフォードとの「対決」=「階級闘争」の他に、大量に集めたクロノールをまとめることによって爆弾の役割をもたせ、スノーピアサーの外部へのドアを爆破しようとするミンスの動きが絡まり、複雑な様相を呈してくる。もし、ミンスが仕掛けたクロノールが爆発すれば、スノーピアサー全体が半壊し大惨事になることが明らかだが、そんなクライマックスに向けての展開は・・・？それは、あなた自身の目でじっくりと！

## ■□「人生いろいろ」なら、近未来もいろいろ！■□

昨年11月8日に亡くなったお千代さんこと島倉千代子のヒット曲『人生いろいろ』は多くの日本人に愛されてきたが、小泉純一郎元総理が言ったように人生いろいろ、男もいろいろ、女もいろいろならまさに、仕事もいろいろ。本作は2031年の氷河期下にある地球を走るスノーピアサーの物語だが、「近未来」を描いた映画は古くは『アルマゲドン』(98年)や『インデペンデンス・デイ』(96年)があり、新しくは『オブリビオン』(13年)や『デイ・アフター・トゥモロー』(04年)(『シネマルーム4』84頁参照)、そして『メランコリア』(11年)(『シネマルーム28』169頁参照)等がある。『インデペンデンス・デイ』と『デイ・アフター・トゥモロー』のローランド・エメリッヒ監督は、「ディザスタームービー」と呼ばれるその手の映画の巨匠だが、ラース・フォン・トリアー監督の『メランコリア』のように、隕石が地球に衝突し、地球の滅亡が避けられないという想定は、たとえ映画にすぎないとは言ってもやはり悲しいものだ。したがって、多くの近未来映画は、幾多の困難を乗り越えたうえで再生していく地球や人類の姿を描いていく。1968年の『猿の惑星』で始まった『猿の惑星』シリーズは人類と近未来について

考えさせられることの多い映画だが、そこでも人類は絶望的な状況に陥りながら最後には何らかの解決策を見出していくところがミソ。しかし、ポン・ジュノ監督が本作で描く近未来の結末は？

本作のクライマックスに向けては、メインストーリーになっているカーティスたちによる最前方車両への到達とスノーピアサーの奪取という階級闘争（革命）とは別に、ミンスが目指すスノーピアサーからの「脱出」という方向性が提示されることは前述した。クロノールの爆発によってスノーピアサーの大転覆事故が起きれば、列車内の人間たちはその大部分が死んでしまうことは明かだが、そこからの更なる再生はありうるのか？ 韓国映画の興行成績トップの1301万人という観客動員数を誇る、ポン・ジュノ監督の『グエムル 漢江の怪物』

では、ソン・ガンホ演ずる主人公が、グエムルに奪われた娘ヒョンソを取り戻すための献身的な努力が描かれていた（『シネマルーム11』220頁参照）が、本作に登場するミンスの娘ヨナを演ずるのも同じ女優コ・アソンだ。最初のシーンでは、ミンスと同じようにクロノールの患者だから少し焦点の定まらない目をしているが、後半からクライマックスにかけてはその存在価値と役割が次第に大きくなっていくのでそれに注目！ とはいっても、列車内で生まれたため本来の地球の姿を知らない彼女が、もしスノーピアサーから放り出されたらどうなるのか？

そんな不安もいっぱいだが、「人生いろいろ」なら、近未来だっていろいろ！ さあ、ポン・ジュノ監督が描く地球の「近未来」の結末は・・・？ それも、あなた自身の目でじっくりと。



『スノーピアサー』 6月27日（金）発売！ 価格 ¥3,800+税  
発売元・販売元 株式会社KADOKAWA 角川書店